

## 輻輳を内蔵した〈擬装〉

—— マリアン・ムーアの世界 ——

森 田 孟

- I. 「～へ」 10篇
- II. 「A は B である」 5 篇
- III. その周辺10篇

### I

Marianne Moore (1887-1972) が85歳の生涯に公表した詩作品は、Margaret Holley の調査によれば189篇で、その初出は全て突き止められているが<sup>1)</sup>、“To—” 「何々に寄する、何々へ」という型の表題の作品が18篇ある。ムーア自身が、「削除は偶発事ではない」 “Omissions are not accidents” のエピグラフを付して公刊した『全詩集』<sup>2)</sup> に収録されている作品は (La Fontaine の『寓話』の翻訳からの抜粋を除いて) 全125篇であるが、そのうち“To—” の型の表題作は9篇であり、初出時に“To—” と題されていて後に改題されたものが他に1篇ある。何に呼びかけられた如何なる性質の作品なのか、初出の順に見てみたい。

### 軍隊の行進に To Military Progress

汝はその精神を  
粃穀を磨り砕く碾臼のように  
使う。  
汝はそれを研ぎ  
歪んだ機智で  
笑う

汝の胴を。それが  
 カラスが、その神が分け与える  
 ような  
 臆病な心に襲いかかり  
 呼びかけて翼をはばたく  
 ような

所にひれ伏しているの。  
 遂にはその騒動が更に  
 多くの  
 黒人緊急応召兵を召集する、  
 犠牲を殆ど払わない  
 戦争の

復活を再び目ざして。  
 彼らは失われた頭を呼び  
 求め  
 各自の戦利品を探し求める、  
 夕べの空が赤く染まる  
 まで。

—*The Egoist*, 2 (April 1, 1915), 62.

この作品、初出時には「〈前進〉の権化へ」“To the Soul of ‘Progress’”となっていたものであり、「臆病な」と拙訳した‘faint’は「親切的な’kind’」となっていた。欧州では第一次世界大戦が進行中であった。「軍隊の進行」に「汝」youと呼び掛けているわけであり、「汝の胴」your torso,「失われた頭」the lost head, などからも分かるように戦場の戦死者を食い荒らすカラスは、戦争を惹起するものそのものと重なり合って、軍隊の行進を促すもの、戦争の象徴のようにすら感じられてくる。犠牲を殆ど払わない戦争を復活させる、というところに、戦争を廃止できない人類を冷静に見据えながら、尚且つ、戦争廃止への希望は未だ失われていないと感じさせる。各連共、第1, 2行, 第4, 5行, 第3, 6行が正確に押韻する。各連の3行目と6行目を因に示せば, chaff, laugh/falls, calls/more, war/head, red/と一語で一行を成している。拙訳

も各連、3行目と6行目とは、押韻めかしてあるが、原詩が全体で、軍隊の行進の音を、重々しく軽快に響かせている趣きは残念ながらとても伝えられない。

反戦詩であり、抽象的で決定論的な行進の概念を賛成の議論によって正当化する人々への攻勢であり、カラスを予兆として、あるいは心を情報処理のためだけに使う人々はムーアの思考法の敵に常になり続けるだろう、とはモウルズワースの言である<sup>3)</sup>。

何かに対して“you”と呼び掛ける以上、それが生物や人間でなければ、擬人化・生物化されていると見られ、軍隊の行進は生き物と看做されていることになる。

次の二篇は、これから4カ月後に、同じ場所に同時に発表された。

### 賞品として得た鳥へ To a Prize Bird

汝は私には都合がよい、私を笑わせられるからだし、  
 汝は盲目になったりしないから 粃穀が  
 風の吹くたび稲叢から巻き上って飛び来たっても。

汝は考えることを知っており、考えていることを話す  
 サムソンの誇りに充ち 寂し気に  
 きっぱりと、それで誰も敢えて汝に立ち止まれとは言わない。

誇りが汝を良い気分にさせ、それで反り返って歩く、巨大な鳥よ。  
 どの納屋の庭にいても汝は滑稽に見えはしない、  
 汝の真鍮のような爪は敗北を頑として撥ねつける。

——*The Egoist*, 2 (August 2, 1915), 126.

初出時は“To Bernard Shaw: A Prize Bird”と題されていた作品である。ムーアはBryn Mawrの学生になったばかりの頃、Shawの『人と超人』*Man and Superman*を読んで、当時、盛んに論争の的になっていたこの進歩思想の文人に言及して、人を驚かそうと粗雑にも希っている普通の人だと述べる冷静さを示したことがあるが、社会に対する彼女の進歩的な態度の多くは、ショーから学び取ったところが少なくないだろう(M. 33-34)。早くから高度の文学的感受性を備えていただけにムーアは、人も事物も、突き放して冷徹に見る眼

も持っていた。笑いの精神と、靱穀が飛び込んでも盲目にならない眼力、考えてそれを誇りに充ちてしかし慎しく話す姿勢、敗北を受けつけない強靱さ、それらはムーアの希った、そして、身につけて生涯保持していたものでもある。生き方の理想を鳥に托して表明した作品であろう。各連共に、1行目と2行目とが押韻する。

### 思慮に欠ける園芸 Injudicious Gardening

もし黄色が不信心のあらわれなら、

私は不信心者だ。

私には黄色い薔薇に悪意は抱けなかった

書物が 黄色は縁起が悪く

白は有望だと言っているからといって。

しかしながら、あなた特有の感情は

私生活を守る感覚は

実際 耳ざわりなことに抗議するかも知れないし

厚かましさを我慢する

必要はない。

— *The Egoist*, 2. (August 2, 1915) 126.

初出時には、“To Browning”と題されていた作品で、ロバート・ブラウニングとエリザベス・バレットとの間の書翰集の中の二カ所の文章にこの詩の典故がある旨自注が付されている。だから「書物」とは、ブラウニング夫妻の書翰集のことで、見聞きしたことに触発されての詩作は、ムーアの一大特徴でもある。ムーアは黄色が好きだったのだろう。後のことになるが、1926年に英国を訪れた時には George Saintsbury に会い、その家の門口にあった黄色い薔薇に強い印象を受けたし、e. e. カミングズ（著名な詩人であるが画家としても知られる）が画いた黄色い薔薇の絵を、自分の机の上に長く飾っていた (M. 225)。

黄色は縁起が悪いからと黄色の薔薇を欠く園芸は、確かに「思慮に欠ける」であろう。権威？に屈する必要はないし、最後の2行も、この詩の主張する要点である。各連共、2, 5行, 3, 4行が押韻する作品である。

ムーアは、二カ月後、同じ詩誌に「蒸気ローラーに」“To a Steam Roller”を發表した。

この作品は既に訳出済みなので、邦訳の重複は避けるが、4行ずつ3連から成る詩で、各連、1, 2行が押韻する。蒸気ローラーの働く姿を具体的なイメージで描きながら、その機械的な力の支配する世界とは対照的な、捉えどころのない美の代表として蝶を登場させたりして、「もしも美に関わる事柄に個人の感情を混じえない判断が/形而上学上の不可能事でないなら、汝[蒸気ローラー]は/ことによるとそれをかなり達成できるかも知れない(Were not “impersonal judgment in aesthetic/ matters, a metaphysical impossibility,” you// might fairly achieve/ it.)と、ひねった表現によって、「美に関わる事柄」には、蒸気ローラー(機械的な判断や操作の象徴か)の働く余地は殆どないだろうという作者の思索が表明されているとみてよかろう。

更に2カ月後には、今度は「国政」に呼びかけられることになった。

### 香気で満たされた国政へ To Statement Embalmed

汝には何も言うべきことはない。護ればよい  
汝の秘密を。それを隠せばよい 汝の堅固な  
羽毛の下に、降神術者よ。

おお

鳥よ、その棲家が「エジプトの織り糸の  
日除け覆い」なので、正義の女神の幽かなジグザグの銘刻は——  
踊り子のように傾きながら——

示す

のだろうか その嘗ては潑刺としていた主権者の鼓動を。  
汝は物を言わず 石棺から  
移住しながら

雪の

沈黙を我々の周りに巻きつけ 消滅しかけた話しぶりをし  
半ばびっこを引き、半ば貴婦人ぶって  
闊歩する。稿<sup>こ</sup>よ 我らは見い出さない

何ら

美德を汝の中に——生きていながらしかもそんなに無口なのだから。

慎重な行動は今や政治家らしい

良識の総和ではない。

尤も

それは生命のない優雅さの化身だったろうか？

まるで死面<sup>デスマスク</sup>がとにかく生命の示す欠陥のある

卓越さに取って替れるかのようだ！

なかなか

急な坂は、汝の王権の余りにも厳格な

割合に、気付けないので、汝は見ることになるだろう 自滅する種々の夢が

ねじ曲げられて歪み それ自身に

向かって

よろよろと進んでゆき、その偏平な嘴で

己れ自身の正体を攻撃するのを、

敵が味方のように、味方が敵のように見えて

くるまで。

—Others, 1, No. 6. (December 1915), 104.

国政がたちまち鳥のイメージで捉えられて暗喩が展開する。“embalm” とは、香料や油で死体を防腐保存する意であり、死霊を呼び寄せる「降神術者」necromancer、「エジプトの」Egyptian（ピラミッドの中のミイラが連想される）、「石棺」 sarcophagus、「消滅しかけた」moribund、「生命のない」dead、「死面」death mask、「自滅の」suicidal と、「死」の縁語とっていいもので全篇を覆い、「欠陥のある卓越さ」faulty excellence という目の醒めるような撞着語 oxymoron を用いて「生命」の本質を衝き、生きていて無口なのは美德ではなく、今や慎重な行動が政治家としての良識の総和といえない時代だという思いが訴え出されている作品ということになるろうか。4行ずつ8連が連分けをされずに一連らなりにされた趣きの形をしていて、4, 8, 12, 16, 20, 24, 28, 32行目が各1語ずつ (O. Show, snow, no, Though, Slow, go, for) から成り、全て [-ou] 音で押韻し、それらの前の各最初の2行が押韻し、直前の行が二つずつ (O, show の各々直前の necromancer と dancer, が, snow と no の各々直前の wind, と find が, というように) 全て押韻する構成である。

それから半年後にムーアは、まるで18世紀の英国小説のような長い題の短詩を発表した。「汝は虹の根方に黄金を求める理想的探索から得られた現実的効

果のようだ」“You are Like the Realistic Product of an Idealistic Search for Gold at the Foot of the Rainbow” (*The Egoist*, 3 (May 1, 1916), 71) である。『全詩集』では、「カメレオンに」“To a Chameleon”と改題された作品でこれも訳出ずみ<sup>5)</sup>なので邦訳は省略するが、如何にも全身を屈め縮めて今にも舌をぱっと出して獲物を捕えんと構えている姿を思わせるような形に詩行を組んだ10行詩である。この詩も、カメレオンに呼び掛けた形を取りながら、この蜥蜴目の動物が象徴する人や物——移り気、浮気(な人)、無節操(な人)、すぐ変化するもの——の発する分散光 spectrum が問題にされている。1, 2行, 3, 8行, 5, 6行, 9, 10行が押韻する。

翌年, Alfred Kreymborg 編の新詩華集 *Others* (1917) の中で発表されたのが「フランスの雄孔雀」“French Peacock”で、後に“To the Peacock of France”と改題された。この作品も既訳ずみである<sup>6)</sup>。同形の9行から成る2連の作品で、各連最初の行に引用があるが、それはH. C. Chatfield-Taylor のモリエール伝(1907)からのものである旨、自注がある。第一連は、「〈自分の財産に気付いてその世話をすること〉であなたは黄金のカケスになった。」“In “taking charge of your possessions when you saw them” you became a golden jay.”で始まり、第二連は、「〈世捨て人は劇場には住まない〉し、雄孔雀は庵では繁育しない。」““Anchorites do not dwell in theatres,” and peacocks do not flourish in a cell.”で始まる。「あなたは感覚の宝石細工になった」“you were the jewelry of sense”, 「あなたは紛い物を憎んだ、あなたは怒鳴り立てたのだ/あれこれ過剰な約束事を色々と用いて。」“You hated sham; you ranted up/ and down through the conventions of excess;” 王様や世間の人々の主な興味の対象となり彼らの自ずからなる愉しみのために「あなたの幅広の尾は広げられたのだ」“your broad tail was unfurled.”と、モリエールの伝記に触発されたムーアが、彼に関する事実を折りまぜながら、モリエールを雄孔雀に譬えて自らのモリエール観を簡潔に些か辛辣でなくもなく表明した作品である。

華麗な雄孔雀から一転して、蝸牛に呼び掛けた小篇“To a Snail”が、ムーアの第二詩集『観察集』*Observations* (1924) に収録される。これも既訳ずみ<sup>7)</sup>だが、デメテリウスの『文体論』からの一文を冒頭に引用することで始める12行の詩である。「もしも〈凝縮は 文体の最初の優雅〉なら/君はそれを持っている。伸縮性は美点である/慎み深さが美点であるように。」“If “compression is the first grace of style,”/ you have it. Contractility is a virtue/ as

modesty is a virtue.' と、蝸牛にことよせながら、秀れた芸術は内部の原理から生ずるのであり、外部の装飾でも偶然の所産でもないことを主張した、詩論詩、芸術論詩である。

それから30数年後、1960年代になってムーアは、また“Too”と題する型の作品を書き、2篇を『全詩集』に収録している。その一篇は、一種の旅行者用イタリア語とムーアの所謂疑似エスペラント語の混合によって書かれた(M. 412) 奇妙な作品である。

私の鴉ブルートについてヴィクトル・ユゴーへ  
To Victor Hugo of My Crow Pluto

「歩いている時にさえその鳥には翼があることを我々は知っている」

——ヴィクトル・ユゴー

について。

私のカラス  
ブルート、

真物の  
プラトン、

青い  
黒色の

緑青色の  
虹——

ヴィクトル・ユゴーよ、  
確かに

私たちは知っている  
カラスには

この詩の最後には  
「そうしても立腹し  
ないかも知れない人  
々のために『エスペ  
ラント語手引』（合  
衆国で作成された）  
に照らした即席の相  
当語句」として、作  
中のエスペラント語  
（句）14箇に英訳が  
付されている。



「翼がある」と、どれ程  
ハトのような足つきで

草の上を時計回りに廻っても。私たちは。  
(ゆるやかに)

生き  
生きと

「カラス」は  
ただ

辞書に  
よれば

私は話す  
イタリア語を——

この擬似  
エスペラント語を

それを、鳥を  
知っているのです

あなたも話すのだ——  
私の誓いと標語は

(誓いと標語)  
私は誓うが

次の信条  
なのである、

利益は  
ずっしりとした重荷である。

だから  
親愛なるカラスよ——

私の  
宝石よ——

私はお前を  
放してやらねばならぬ、

美しい森へ  
自由な姿で、

完全な  
ジプシーの、

葡萄色がかった黒い  
天使を

結局のところ  
海の向うなのだ

慎しやかな  
プラトンよ、さらば。

——*Harper's Bazaar*, 95 (October 1, 1961), 120.

ムーアは殆ど同じ時期に、同誌の一号前に短い散文「私の鴉プルート——ある空想」“My Crow, Pluto——A Fantasy”<sup>87</sup>を寄稿した。或る日、鴉についての一行二音節の二行連詩——My Crow/Pluto// the true/plato// adagio——を書こうと思いついたが、詩ほど限定を受けなくてすむので散文に変更する、と書き出し、自分は常々、鴉が欲しいと思っていたら、クリスマスに機械仕掛

けの鴉をもらい、生きている鴉も手に入って夢が実現したと言う。この鴉は近所の公園から、ムーアの愛用した鍔広の帽子の羽根飾りに魅せられて彼女に連れてきてペットとなったものであった。もしこの鴉ブルート（とムーアは名付けた）に、ポウの「大鴉」“The Raven”の中の反復句は何だった？と訊ねたら、きっと、“Nevermore”ならぬ“Evermore”と応答したことだろうとムーアは巧妙にこの鴉について他の愉快的挿話共々書き進め、結局、他人に要求することは自らも実行しなければならぬから、隣人がアライグマを捕えて飼っていたら、それを捕えた森へ帰してやるように説得するだろうから自分もその鴉を解放したのだという。或る日、ブルートに、お前はどこで生れたの？と訊ねたら「コレクト・アカウント」（正確な計算）のように聞こえる返事をしたので、「コネティカット」かいと問い返したらそうだと応えたのでConnecticutの森へ連れて行って放してやった。人生は小説よりも奇なりです、と結ぶ美事な随想であった。機械仕掛けの鴉とはピアノ演奏家の経歴もあったムーアの崇拜者の一人 Chester Page が贈り物にしたものである。名声の挙げたムーアに、多くの人々はしばしば、詩にしてもらえるかも知れないと希って色々な贈り物をしたが、その一つであった (M. 412)。

この詩は、外観は、愛玩動物の鴉を愛情深く描写したものだが、詩の主題が誤解されないようにユゴーの文学上の威厳を祈願するものであろう (M. 412)。戯詩には違いないが、遊びの精神と共に、鴉と詩人が共有する甚だ真面目な標語“lucro/ è peso morto”「利益はずっしりとした重荷である」が顕わになる作品ではある (M. 413)。全ての行末の、綴りの ‘-o’ や [-ou] 音による脚韻は、「詩一般の有する軽快な調子を前面に押し出すもの」(H. 151) で、ムーアは同種の試みをもう一度行っている。後に次のように改題した“Occasionem Cognosce”である。

### 「熱心に」 Avec Ardeur

律動が何であるかを承知している親愛なるエズラに

私は考えてきた——つまり、熟考してきた//つまらぬ大騒ぎをすれば/退屈になる。//困惑しているかって？/ええ、そうです。私は避ける//「賞讃する」/と「退屈させる」を。//私は、まあ/（退屈させる）//という語によって/退屈している。//私は拒む/「神聖な」を//使うことを/何か快適な/ものを指示するのに、//「恐しい色」を/ある恐怖を表わすのには。//私自身は平板/では

あるが、言うことにしよう//「アトラス」/(圧縮ガラス)は//最もよく浮彫に/されたように見える。//私は使う/ことを拒む//「魅惑する」を/「発狂させる」を、//「恐しい苦/境」さえも/(どれ程正当であっても//あるいは「軽/薄な愚か者」を/(どれ程相応しかろうと)。//私は避けてきたのだろうか/依然として罨に嵌っている、//こういう言葉の/病気によって。//絶え間なく、/言い回しは//抒情の力を/欠いている//古代アテネのや/アルカイオス句格のとは違って、//あるいは風変りな/サラサ模様のギリシャ語とは。//これは韻文ではない/勿論。//私はこう確信する、//現世のものには神聖なものはなく/神聖なものには現世のものはない、と。

—*Occasionem Cognosce: A Poem* (Lunenberg, Ver.; Stinehour Press, 1963)

押韻する二行句22連に、一行句2連と三行句2連の組み合わせから成る26連の詩だが、紙幅の節約上、上掲のように記した。音律上の実験をしながら、詩人としての自らの姿勢を表明し、最後の対句(Nothing mundane is divine;/ Nothing divine is mundane.)による自らの確信を示したものである。

同年、ムーアは次の一篇を発表した。

### 麒麟へ To a Giraffe

もしも個人であることは許されず、実は致命的であり  
字義通りであることは

望ましくなく——眼が無邪気ならともかく  
有害でもあるとしたら——人は

背の高い獣にしか届かない梢の  
小さな葉を食べて生きるしかないということだろうか——

その最もよい例は 麒麟である——  
打ち解けない動物。

心理的なものに悩まされると、

どうにも抗し難い程魅力に充ちたものになった筈の

生物が 耐え難いものになることがある、  
いや 厳密に言えば、異例なものになることが、

何しろ感情が過敏に乱される動物ほどには  
打ち解けないのだから。

### 結局

形而上的なものの慰めが  
深いものとなり得るのだ。ホメロスにあっては存在は

罅が入っており、超越は、条件付き。  
「罪から贖いへの旅は、永遠のもの」。

——*Poetry in Crystal* (Steuben Glass, Inc., 1963), 44.

自注——エニス・リーズが、『オデッセウス』の中には、存在の条件付きの性質、形而上的なものの慰め、つまり罪から贖いへの旅が、表現されているのだと見る時、彼はこの作品を要約しているのだと私は感じている。——が付されている。

もしも、個人的であることは致命的とされ、文字通りの生き方をすれば、眼が無邪気ならともかくだが、有害だとさえされるなら、人は麒麟と同じだという特異で奇抜な譬喩が美事であり、麒麟に託して人間の生き方を洞察した作品である。哲学的な思索による慰めに期待を寄せたのだと受け取れるだろうか。

この作品は、初期の作品「蝸牛へ」や「蒸気ローラーへ」のような、言語による知識の獲得の可能性を容易に放棄する調子から、後期の、もう少しその可能性を容認する調子への移行を示すもののだとして、言葉の問題と捉える観方もあるし<sup>9)</sup>、最終行の「罪から贖いへの旅」云々の処で、この詩人が罪の現実性を信じていた証左と見る研究者もいる<sup>10)</sup>。

『全詩集』に収録された、「何々に（寄せて）」と題された9篇は、呼び掛けられたものが動物以外のものにも全て何らかの動物が作中に登場するところが興味深い<sup>11)</sup>が、呼び掛けられた当の物の本質を簡潔に具体的に描写しながら、それに托して別の事柄（作者の人生や人間、文学や芸術、社会への洞察）が表明

されているわけである。初出時にブラウニングに呼びかけられていた「思慮に欠ける園芸」には植物が登場するが、作品の標題や作中に動植物が実在にしる譬喩としてにしる、何らかの形で現われるのはムーアの一大特色である。

カメレオンと呼ぶことが、他の芸術家に対するムーアのお気に入りの讃辞だった、と指摘するコステロは次のように述べる。「カメレオンに」では、擬装 (camouflage) が謙遜という武具になり、それは、この詩人が自らの言語を日常の言葉と事物の森に混入しようとする努力に相当する。その擬装という覆いは、物の現実性を隠すと共にそれを表現する唯一のものとなるという二重性をもつのだ、と<sup>11)</sup>。

ムーアの、呼び掛けの詩は全て、二重性、あるいはそれ以上の輻輳を内蔵する〈擬装〉の作品であり、それは彼女の世界の本質でもある。それをこれから、他の作品で示したいが、上掲の諸作にも見られたように呼び掛けられた対象は、何々である、何々する、と、しばしば、定義めいて述べられていた。この、何かを定義するような定義詩が、これまたムーアの重要な特色の一つなのである。その端的な表われは、AはBである、という類の標題の作品である。『全詩集』に収録されたこの型の詩は五篇ある。初出の順に見てみたい。

## II

### 過去は現在 The Past is the Present

もしも外面的な行動が気力を欠き  
押韻が時代遅れのものであるなら

私はあなたに逆戻りしよう、  
ハバククよ、ある聖書の授業で

先生が押韻のない韻文について話していた時のように。  
彼は言ったのだ——それで私は彼の言葉を正確に反復しようと思う、

「ヘブライの詩は散文で

一種の際立った意識をもっている」<sup>12)</sup> と。恍惚状態は機会を  
生み 便宜は形式を決定する。

—Others: An Anthology of New Verse, ed., Alfred Kreymborg  
(New York : Alfred A. Knopf, 1917) pp. 74-5.

初出は、詩誌 *Others*, I, No.6 (December 1915) 106, であり、その時のこの詩の標題は「未来に関する限り……」‘So far as the future is concerned…’であった。『全詩集』に収録された際、(1)にはペンシルベニアのカーライルの長老派教会の聖書クラスでの、E. H. Kellogg 博士の言葉である旨の自注が付された。

ハバククは紀元前7世紀頃のヘブライの予言者で、旧約聖書「ハバクク書」がある。標題そのものが一種の撞着語法であるが、言われてみれば、現在とは、過去の全ての積み重ねから成るものであるから、確かに、「過去」であるには相違ない。現代詩は自由詩が全盛であるから、押韻は時代遅れかも知れないが、それにしても分窮屈な定型詩や押韻に挑戦する現代詩人たちはムーア没後20年過ぎた現在でも、決して、少なくないし、ムーアは既に本稿でみた諸作でも顕著だったように種々様々な押韻を意欲的に実験し実践した。彼女の詩は「際立った意識」heightened consciousnessの詩であり、この作品の結末の二つの陳述は、読者にも深い思索を促して止まない。

## 太陽 Sun

希望ト恐怖ガ彼ニ近ヅキ挨拶スル

「誰も彼を 落ち窪んだ

目をした死から隠せない」、

我々には この不都合な真理は十分ではない。

そなたは男でも女でもなくて 一つの計画であり

人間の心の中深く企まれているのだ。

隠された光輝で輝いてそなたはやって来る、アラブの住居からそなたの前に馬を御してきた偉大な王子の手の中にすっかり包まれた火と燃ゆる

黄玉となって、太陽よ——彼をそなたは追い越した、

彼の隊商を貫きながら。

おお太陽よ、留まっけてもらおう

我々のところに。祝日よ、

怒りを燃やし尽して、ムーア人の豪華な

装置の中に包まれていよ、円筒形のガラスが回転して

炎の輝きを発する、軸へと次第に縮少してゆく  
 一箇の大きな砂時計の半球のように。敵対心を焼き尽せ。  
 そなたの武器を用いよ 波打って押し寄せる敵意に満ちたこの集会所で！  
 反抗した足取りには 増大した炎を  
 追い越させたりはしない、おお太陽よ。

—Contemporary Verse, 1 (January 1961) 7.

初出時の標題は、「恐怖は希望である」“Fear is Hope”であった。一連9行から成る二連詩で各連共、1, 2/4, 5/6, 7/8, 9/と二行ずつ押韻し、第一連と第二連の各々3行目同士 (suffice, device) が押韻する。太陽に呼び掛けられている詩である。

### 年月とは何か What are Years ?

私たちの潔白とは何か、  
 私たちの罪とは何か。全ては  
 裸であり、安全なものは何もない。するとどこから  
 勇気は来るのか。答えられない質問、  
 断固たる疑い、——  
 声も出さずに呼びかけながら、聞こえずに耳を澄しながら——  
 不運の中にあつては、死さえ  
 他人を励まし  
 また 魂の敗北の際には 魂を

強くなるようにと奮起させるのだろうか。彼は  
 深く見て嬉しいと思う、というのも  
 死すべき運命に同意し  
 捕われの身となると 自ら 深い  
 割れ目の生じた海のように  
 立ち上って自由になろうと  
 躓き、そう出来ないと  
 それに屈服しながら  
 その状態が続いてゆくのだから。



それで 強く感じる人は  
 行動するのだ。正にその鳥は、  
 歌っているうちに背が前より高くなって、己が  
 姿に鋼を被せて真直ぐ身を起こす。彼は捕虜ではあるが  
 その力強い歌いぶりは  
 言う、満足などは卑しいことだ、  
 純粹なものは何という喜びであることかと。  
 これが死すべき運命というものだ、  
 これが永遠というものだ。

——*The Kenyon Review*, 2 (Summer 1940), 286.

我々の潔白とは、罪とは、勇気の出所は、と問いかけながら、「声を出さずに呼び掛けながら」*dumbly calling*、「聞こえずに耳を澄しながら」*deafly listening*、とここでも撞着語法を重ねながら、死を、死すべき運命を、行動を、考察し、純粹なもの、永遠、を考えてゆくが、またも、鳥が暗喩に使われる。疑問形によって定義を追求する。欧州では第二次世界大戦が始まって戦局が進んでいる時期である。各連1, 3行と最後の2行が押韻する。詩集『年月とは何か』*What are Years?* (1941)の標題詩である。

同じ詩集に収録された次の作品は、ナチスドイツに占領されたフランスの解放を希う詩であるが、典拠がびっしり内包されているムーアの面目躍如たるものである。束縛からの解放の代表として、ヴォルテール、モンテーニュ、リトレを挙げ、光は解放をもたらす話し言葉であり、話し言葉は解放を導く光であることが主張されている。

### 光は話し言葉    *Light is Speech*

人は日光についての方が多く語れる  
 話し言葉についてより、だが 話し言葉と  
 光は、互いに  
 互いを助けながら——フランス語だと——  
 あの未だ絶滅させられていない  
 形容詞に恥辱をもたらしてはいない。  
 そうなのだ、光は話し言葉なのだ。惜しみなく公然と

公平な日光，月光，  
 星の光，燈台の光は  
 言語なのだ。あの，岩の  
 無防備な一点の上に建っている  
 クレッシュ・ドゥサン  
 燈台は<sup>(1)</sup>，子孫なのだ，その燃え上るような正義を

既に危害を被った人間<sup>(2)</sup> に屈けた  
 ヴォルテールの。また  
 その均り合いの取れた態度を  
 山賊の手荒さにもめげずに  
 保持して 良心の呵責が  
 貯えている花火を発せしめた  
 素手のモンテーニュ<sup>(3)</sup> の。また  
 言語学の断固たる  
 熱烈な八巻本の  
 ヒポクラテスに魅了された  
 編纂者エミール・リトレ<sup>(4)</sup> の。火の  
 人，自由に行動した  
 科学者は，確固たるマクシミリアン

ポール・エミール・リトレだった。海に  
 護られた英国である  
 我々は，港のそばで松明を  
 掲げ持つバルトルディ作の補強された  
 自由の女神像<sup>(5)</sup> を所有しているが，フランスが  
 要求するのを耳にする，[真実を語ってくれ<sup>(6)</sup>，  
 特にその真実が  
 不愉快なものである時に」と。それで我々は  
 応えざるを得ない，  
 「フランスという語は  
 解放することという意味だ，〈フランスの  
 ことを考える人は誰にしる，元気付ける<sup>(7)</sup>〉ことの出来る人のことだ」と。

——*Decision*, 1 (March 1941), 26.

(1)のクレッシュ・ドゥサン海洋飛行燈台については、南北アメリカから欧州大陸に近づく船や飛行機が最初に目にするように計画されている、という自注があり、(2)は、自分の息子を殺害したという不当な咎を受けて1762年3月9日に死刑に処せられた Jean Calas とその家族の無実を立証しながら Voltaire が書いた文章が、(3)は、山賊に捕われながら思いがけず解放された Montaigne が述べた言葉、「私が釈放されたのは、私が、怖じ気付くことのない決然たる話しぶり」と態度とで捕えておくには勿体ない人物であることを示したからだ、と告げられた」、が、また(6)はペタン元帥の言葉であり、(7)は、Janet Flanner の言葉(*Decision*, January 1941)が、典拠である旨自注がある。(4)には「Littré (1801-1881) は1839-1862年の年月をヒポクラテスの翻訳と編纂に捧げた」(5)には「Bartholdi の自由の女神像は世界を輝かせている」と自注されている。ペタン元帥が、第一次世界大戦で活躍したフランスの将軍で、第二次世界大戦中には Vichy 政権の国家主席 (1940-44) を務め、戦後反逆罪で死刑宣告を受けたが後に終身刑になった Henri Phillippe Pétain (1856-1951) であり、バルトルディが、New York 湾内の自由の女神像 (Statue of Liberty) を製作したフランスの彫刻家 Frédéric Auguste Bartholdi (1834-1904) であることは言うまでもない。

次の詩集『にも拘わらず』*Nevertheless* (1944) に収められた定義詩の一篇は、標題の主語が作品の一行目の主語ともなって全体を統括する。

### 精神は魅惑するもの      The Mind is an Enchanting Thing

であり、魅惑されたものである

太陽に細分されて

網目が無数にみえる

キリギリスの翅の

上の艶のような。

スカラッティを演奏するギーゼキングのような。

嘴のような

アプテリックス・オウル

あるいはキーウィの毛の生えている

羽の雨除け肩掛けのように  
まるで盲目のように手探りで進む精神は  
眼を地面に据えて歩んでゆく。

それには 聞く必要も  
ないのに聞こえる  
記憶の耳が備っている。  
ジャイロスコープの引き鎖のように  
全く曖昧なところがない  
まずは確実に正しく調整されているので、

それは 強烈な魅力を  
備えた力である。それは  
太陽によって活気づいた  
鳩の首のようだ、  
それは記憶の眼だ、  
それは注意深い不整合だ。

それは覆いを引き裂く。引き裂がすのだ  
誘惑を、心が  
まとっている霞を、  
その眼から——もしも心に  
顔があるなら。それは失意を  
分解する。それは火だ 鳩の首の

虹色の中の、  
スカルラッティの  
不整合の中の。  
混乱のなさは精神の混乱を  
証拠立てる。それは  
変えられないヘロデの誓いのようなものではない。

Walter Gieseking (1895-1956) はドイツの生んだ名ピアニストで、その粒揃いの音がきらめき輝く端正さで特に名高い。イタリアの作曲家 Scarlatti (父 Alessandro [1660-1725], 息子 Domenico [1685-1757]), 特にドメニコのソナタをギーゼキングが演奏した場合の精神性の高さには定評がある。

「アプテリックス・オウル」 apteryx-awl はニュージーランドに生息する絶滅に近い鳥で、翼が退化して飛べず、地面を嘴で突くようにして歩く。「キウイ」Kiwi ともよばれる。awl は「突き錐」である。ヘロデは Herod Antipas で、ガリレアの支配者 (AD. 4-39)、バプテスマのヨハネの処刑を命じ、イエス・キリストの裁きに関わった。

精神という〈抽象〉的なものの、魅惑し魅惑される本質を、微細で甚だ特殊な美しい〈具体〉によって描写し、定義したもので、[i] 音や [l] 音の響き合う韻律と相俟って読者の精神を魅惑してやまない。

この作品を、詩集『にも拘わらず』の中でも、美の見地から言って最も挑戦的な詩だと見るモウルズワースは言う。古くからの哲学上のパラドックスをからかうように述べ直すことで始められたこの詩は、客体を主体に変えることによって、表題の「魅惑する」精神が第一行の「魅惑される」精神になり、我々の意識が、我々の知識の目的、及び、我々の正体の主観の原理になる有様を示すのだ、と。また、彼は、この詩を、1920年代の現代主義者流詩学 (modernist poetics) を振り返っているものとしても読めると言い、知性の作用の「良心的な不整合」というこの詩の主要な観念の一つは、不整合を優れた美德として賞讃した Reinhold Niebuhr の講演からムーアが示唆を受けたものであることが、彼女の覚え書から分るとも指摘している (M. 314-15)。

以上、ムーアの、「～へ」と題する作品群と「AはBである」と題された作品群とを見てきたが、それらの前後に配された興味深い作品を、『選詩集』 *Selected Poems* (1935) の最後から『年月とは何か』 *What Are Years* (1941) にかけての9篇と、『おお、龍になれたら』 *O To Be A Dragon* (1959) からの1篇の、計10篇を以下に訳出しておきたい。作者の自注のみに触れて、作品の「読み」には取敢えて関わらないでおこう。この10篇の作品の訳出そのものが、ここでの主要な関心事なのである。

## III

「猿を食べる以外病める獅子は癒せまい」  
 “Nothing Will Cure the Sick Lion but to Eat an Ape”

仮面舞踏会の態度には  
 美の軽快な運動量では埋め合せの出来ない  
 空ろさがあると気付いて、  
 というのも どこにあっても均り合いの取れない満足には  
 均り合いの取れた態度は欠けるからだが、

彼は私たちに 腹を立てさせないで知らせてくれた  
 威嚇するように両手を  
 持ち上げて 猿で私たちを治療する  
 やり方を自分は軽蔑するのだと——新鮮な空気で  
 私たちの息を詰まらせることを自分の関心事にするのだと。  
 ——*Observations*, (1924), p. 26.

標題は Carlyle だ、と無愛想な自注が付いている。

「彼は歴史書を書いた」 “He Wrote the History Book”

ほら！ あなたは気紛れの光線を  
 深遠の仮面の上に余りにも恐しく  
 撒き散らすので、私はそれに啞然とさせられて  
 きたのだ 言いたいと思うよりもしばしば。  
 その本だって？ 標題とはがらくただ。

確かに  
 簡潔で精力に充ちて、あなたはお父上の読みやすさに  
 寄与し 十分に  
 総合的だ。ありがとう 私にお父上の  
 自筆原稿を見せて下さって。

——*The Egoist*, 3 (May 1, 1916) 71.

この詩には、C. M. Andrews 博士の息子 John Andrews が五・六歳の時に、名前を訊ねられて、「ぼくの名前はジョン・アンドリュースだ、ぼくの父は歴史書を書いた」と答えた、という自注が付されている。

### 鯨の中の滞在      *Sojourn in the Whale*

錠のかかった扉々を剣で開けようとしながら、針の  
先端に糸を通しながら、日除け用の木々をめちやくちやに  
植えながら、海があなたを愛するよりもっと深く  
愛する人の不透明さに呑み込まれながら、アイルランドよ——

あなたはあらゆる種類の不足を凌ぎながら常に生き続けてきた。  
あなたは魔女たちに藁から黄金の糸を紡いでもらわざるを得  
なかったし 男たちが次のように言うのを聞いてきたのだ、  
「我々のとは全く対照的な女性らしい気性というものがあり、

それが彼女にこういう事柄をさせるのだ。盲目という遺産と  
生来の不適格とに周囲を取り囲まれているので  
彼女は賢くなるだろうし 譲歩せざるを得ないだろう。  
経験に強いられて、彼女は引き返すことだろう、

水はしかるべき平面を求めるのだ」と。

それであなたは微笑んでしまった。「流動している水は  
平面どころではない」<sup>1)</sup>。あなたはそれが、たまたま障害物が  
通路を妨げた時、自動的に生ずるのを見てしまったのだ。

——*Others* (1917), p. 78.

(1)には *Literary Digest* が出所である旨自注がある。

## 厳格主義者 Rigorists

「私たちはトナカイが若葉を  
食んでいるのを見た」と、ラップランドにいたことのある友人が言った、  
「自分たちの食べものを見付けながら。彼らは適応している

乏しいライノ  
つまり 牧草に、でも彼らは走れるのだ、11  
マイルを50分で。雪が柔らかい

時は両足を開いて、  
雪靴のように行動する。彼らは厳格主義者だ、  
どれ程美事に ラップランドや

シベリヤの透かし模様刺繍の  
芸術家たちが 精巧に引き革や  
鞍用腹帯を 鋸歯状の革レースで作り上げようとも。

一頭が私たちを見た  
半ば褐色、半ば白色のしっかりした顔付きで——高山の  
花々の女王だ。サンタクロースのトナカイは 遂に

姿を見せたが、灰  
褐色の毛皮をしており、首はエーデルワイスか  
ライオンの足——もっと正確には

〈レオントポウディウム〉のようだった」と。それで  
この 枝状燭台の頭をした装飾品は  
装飾の乏しい場所のためにと、アラスカへ

送られたが  
エスキモー族の滅亡を阻止するための  
贈り物だった。この戦いは勝ち取られたのだった



一人の静かな男性、  
 シェルドン・ジャックソンによって。その人種にとっての福音だった  
 彼らの回復を 彼はトナカイの顔の中に読み取ったのだった。

——*Life and Letters Today*, 26 (September 1940), 243-4.

この詩には Sheldon Jackson (1834-1909) について、彼の報告書に基づいての長い自注が付いている。エスキモー族を扶養するのに政府の費用を使うのは当を得ていないと感じた Dr. Jackson は鯨は殆ど根絶状態に近く、川に放魚するように大海に生物を補充するわけにはゆかないからと、シベリアからのトナカイの移入を公認するように政府を説得して、彼は1891年の夏に遠征して16頭のトナカイを物々交換で確保し、後には更にもっと移入したのであると。

〈レオントポディウム〉は、ラテン語で文字通りには「ライオンの足」の意だが、アルプス産キク科ウスユキソウ属の高山植物であるエーデルワイスの学名が“*leontopodium alpinum*”なのである。第6連には、そういう言葉の洒落、遊びが試みられている。ムーアの得意とするところである。各連の2, 3行が押韻する。

### 彼は「鋼鉄を消化する」 He “Digesteth Harde Yron”

マダガスカルに生息していた  
 エペオルニス あるいはロック、それに  
 モアは絶滅しているが、  
 大ききの点で彼らと  
 繋りのあるラクダズメ——流れのそばを  
 歩いているのをクセノフォンが見た大きな雀<sup>(1)</sup> は——正義の  
 象徴<sup>(2)</sup> だったし今もそうだ。

この鳥は雛を母親らしい  
 集中力を籠めて見詰める——そして彼は  
 夜間六週間 母親として  
 抱卵し続けた——彼の両脚は  
 彼らの唯一の防禦武器。

彼は馬より足が速く、蹄のように  
堅い足を持つ。豹も

それ程には疑い深くない。どれ程  
彼なら、羽毛と卵と子供のせいで尊ばれて  
乗用獣としてさえ用いられて、人間を尊敬できることだろうか！  
人間は俳優のようにダチョウの皮に隠れて<sup>3)</sup>、右手で  
その首を生きているかのように動かし  
袋から左手で穀粒をばら撒いて ダチョウが

誘き寄せられて殺されるように出来そうだから。そうだ、これこそ  
羽毛が 古代には正義の  
羽毛だった彼なのだ、その  
大きな首の上の滑稽な仔鴨の  
頭を 羅針盤の針の神経質ぶりを見せて回転させる彼なのだ、  
歩哨に立つ時に

S字状に餌を捜し回りながら彼は  
鉛の肌の背の上の産毛を嘴で毛繕いし続ける。  
敬虔な姿の卵は  
カストールとポルックスが  
孵化して出てきたレダの卵<sup>4)</sup> そのもののように見えるが  
ダチョウの卵だった。それで、この鳥以上にそれが常食とした中国の芝生に  
相応しいと思われるものが何かあり得たろうか

それは見慣れない鳥を  
賞讃した或る皇帝への贈物とされたのだが  
土の中に泥で捏ね上げた  
巣を作りながら 湖か海の中を  
頭しか見えなくなるまで涉ってゆくことだろう。

.....  
一度の饗宴に供された六百羽の  
ダチョウの脳味噌<sup>5)</sup>、ダチョウの羽毛を先端に被せたテントと

砂漠用槍、宝石の豪華さに満ちた  
醜い卵殻のように砕けやすい  
高脚付きグラス<sup>(6)</sup>、引き具をつけた  
八組のダチョウ<sup>(7)</sup>は 実在論者には常に  
見落される意味を劇的に表現する。

可視の世界の力は  
不可視の世界である、自由の木が  
全く育っていない所でさえ  
所謂蛮勇が知っているように。

英雄の資質は人を消耗させる、がそれにしても  
それは 無害なロドリゲスソリテアや  
威風を誇ったオオウミガラスを生存させておける程賢くなかった

強欲とは相入れない。  
抜け目なくガルガンチュアのように巨大で  
小翼の、壮大なまでの速力を持つ疾走鳥  
以外は全ての巨大な鳥を呑み尽くしてきた無頓着ぶり。  
これに対する生き残りの一反逆者が  
スズメラクダ<sup>(8)</sup>である。

——*Partisan Review*, 8 (July-August 1941) 312.

表題は John Lyly の、華麗な美文體 Euphuism の語源となった作品 *Euphues* (1578-80) の一節「ダチョウは健康を保持するために鋼い鉄を消化する」に由来する旨の自注がある。(1)は(5)(7)と共に George Jennison の『古代ローマに於ける見せ物と楽しみのための動物』*Animals for Show and Pleasure in Ancient Rome* に、(2)(3)(4)は、Berthold Laufer の *The Open Court* 誌(May 1926)の文章に、(6)は Edward Wenham の *New York Sun* 紙(May 22, 1937)の文章に、それぞれ典拠がある旨自注があり、(8)にはギリシャ語“στρουθιοκάμηλος.”(雀駱駝)がぼつんと注記されている。

エペオルニス (aepyornis) は Madagascar に生息していた駝鳥より大型の鳥でロック (roc) の伝説を生んだとされる。ロックは、アラビアの伝説上の巨大な怪鳥で、象を爪で持ち上げて餌にしたという。モア (moa) は New Zea-

land 産のモア目の駝鳥に似た空を飛べない巨鳥の総称で、500年ほど前に絶滅した。大モアなどは高さ4mに達したという。カストールとポルックスはギリシャ神話に現われる Zeus と白鳥 Leda の子で、相愛の双生児兄弟、水夫の守護神である。ロドリゲスソリテアー (solitaire) は Rodriguez 島に1730年まで生存していたドードー科の鳥であり、オオウミガラス (great auk) は、北太平洋方面に生息していた飛べない海鳥で19世紀中に絶滅した。

生物学を大学で専攻したムーアは、動物に殊の外、深い関心を寄せた。人間が他の生物を次々に絶滅させてゆくことに限りない憤りと悲しみを生涯抱き続けたのである。それが端的によく表出されている作品である。

### 研究者 The Student

「アメリカでは<sup>(1)</sup>」と その講師は  
 始めた、「誰もが学位を持たねば  
 ならない。フランス人は全ての人が  
 それを持ち得るものとは考えない、彼らは誰もが  
 大学に行く必要はないと言う」と。我々は  
 ここで 感じがちだ  
 十五ヶ国語を知るのは

不必要かも知れないが  
 学位一つは多すぎはしないと。我々にとって  
 学校は——歌っている木<sup>(2)</sup> のようなもので その  
 葉は音楽会で歌っている口だったのだ——  
 知識の木であると共に  
 自由の木でもある、——  
 一様に大学の標語に

見られるように、〈光と真理〉、  
 〈キリストとキリスト教会に〉〈\*sapient  
 felici〉など。おそらく我々には  
 知識はなく、ただ意見があるだけで、我々は  
 学部学生であって

研究者ではないのかも知れない。知っていることだが

我々は 微笑まれながら応えられてきたのだ

国籍離脱者に「あなたの実験は

何時終わるのですか」と訊ねては<sup>(4)</sup>「学問には

決して終りはない」と。家族の

紛争から身を引いて ジャック・ブックワームは<sup>(4)</sup>

学生生活を送ったとゴールドスミスは言う、

で、ここでもまた

フランスやオックスフォードでのように、学業には種々の危険が

つきまとう——シミ、カビ、

及び愛想のよい従順さが。だが ニュー

イングランドにはこう言えるだけのものは心得ている人もいる

研究者とは忍耐の化身であり、

「無視と非難とに<sup>(5)</sup>

耐え得る」

多種多様な英雄であり——「己れ自身を

堅持し」得る人だということを。雌鶏を鞭打って

卵を産ませるわけにはゆかない。狼<sup>(6)</sup>の毛は最上の毛だが

刈り取るわけにはゆかない、狼は

同意しそうなないから。狼の無愛想さと

同じような知識で

研究者は自発的に

研究し、個性を発揮できない

ことを拒むのだ。彼は

「自己の意見を述べ、それからそれに基礎を置く」<sup>(7)</sup>、

彼は報われない時に奉仕を

提供し、余りにも世俗から離れているので

何事かが彼の心を動かすことは

なさそうに見える。彼に感情が

ないからではなく 余りにも豊富にあるからなので。

—Poetry 40 (June 1932) 122-6

この作品にも自注がびっしり付されており、(1)の講師とは、パリのフランス語学校・大学国立局の局長補佐 M. Auguste Desclos のことで、その講演(1931年12月3日)が出典であり、(2)は『アラビアンナイト』の中の一節「どの葉にも口があり、葉は皆、音楽会に参加した」に依る。(3)は Albert Einstein が或るアメリカ人の学生に答えた言葉であり、(4)は Goldsmith の作品『二重の変形』*The Double Transformation* 参照、(5)はエマソンの「アメリカの学者」“The American Scholar”の中の言葉に由来し、(6)は Edmund Burke が1781年11月に Fox に答えた言葉に、(7)は Henry McBride の *New York Sun* 紙(1931年12月12日)の、Dr. Valentiner を讃えた文章に基づく旨、断つてある。

\* このラテン語は、誤記か誤植か、意味不明なので原語のままにしておく。

### 滑らかな瘤だらけのサルスベリ

### Smooth Gnarled Crape Myrtle

木の実のように滑らかな草緑色の  
喉をした真緑色の小鳥が 小枝から  
小枝へ斜めに飛びながら、中国の  
花飾りを模倣している——数学でいう  
環状の、堅い葉の木の  
青桃色の葡萄酒の澱の  
ピラミッドに着いた  
事務的な原子、一対の中の  
一つ。手斧状冠毛を持つ  
猩々紅冠鳥が真直ぐ降りて止まる、二本の  
間の小枝に、特異な花束の  
綿毛を  
傾けながら。そして蛾が

おり、テントウムシがおり、  
黒い翅と桃色の頭の

靴脱ぎ器形ホタルがいる。「純粹サンスクリット語  
でしか歌わない伝説上の白耳  
黒ブルブル<sup>(1)</sup>」が  
ここに居るべきだ——「人に慣れた賢い  
真物のナイチンゲール」が。通常  
対になっている深紅色の  
鳥は、些か奇妙に見え、丁度  
「ニューヨークでは<sup>(2)</sup>  
正装するが  
ロンドンの夢をみる人が

着用する大使用の  
二重回し」のようだ。それは企んだ格言で、  
熱烈な文字を書くための  
場所である端切れ箱状の鳩の卵の上に、ヒヤシンス青色の蓋の上の  
一対の下に鳥の爪で書いたように  
書かれていた——「友情のうちに<sup>(3)</sup>  
一緒になり、愛によって仕上げられた」と。  
一つの面は欺くかも知れない、丁度  
象の、オダマキの筒状部の鼻が  
ぐらぐらと差し出されている時のように——  
自由勝手にどっしりしたものは——扱いが  
微妙なものだ。  
芸術は不幸なものだ。

人は非難の余地なき  
独身男性であり得ようし、それはコングリーヴへの  
一步にすぎない。ロザリンドのいない  
猩々紅冠鳥は 人々の居る所へやってくる、人々が  
彼の居る所に必ずいるような  
ことはこれまでなかったと知っているの——この鳥は  
歌いはしないがこう言う、「孤独で<sup>(4)</sup>  
ないなら ぼくはもっと孤独に

なるべきだ、だから孤独を保つのだ」と——半ば  
日本語で。それで我々の  
握りしめた両手のうちの何が誓うのか、<sup>17</sup>「平和によって  
豊富を、慧智に  
よって平和を、のように」と。ああ全く！

——*New English Weekly*, 8 (October 17, 1935), 13.

五ヶ所に自注があるが、(1)は、*New York Sun* 誌 (1934年6月23日) の記事に依るもので、ブルブル (bulbul) がスズメ、ウグイス、ホホジロなど同様、属を表わす広い用語であること、ペルシャの伝説上のナイチンゲールは耳の白いブルブルで、褐色、白、サフラン黄色で飾られた黒いビロードで豊かに覆われていてそれが本当のブルブルであること、Edward FitzGerald が Omar が言おうとしたことを——人間の話し言葉は変化し粗野になるが、ブルブルは永遠に、古代の詩人たちの純粹に英雄的なサンスクリット語である「高音で囀る Pehlevi」で歌う、と語っていること、が記されている。

(2)は、*The Playbill* 誌1935年1月号の Beau Nash の言葉「ニューヨークでは眠るがロンドンの夢を見る人々」が、(3)は、Battersea [ロンドンの旧自治区で現在は Wordsworth の一部] の公衆電話ボックスの標語であること、(4)は *The Spectator* (London) 誌1935年2月15日号で、Yoné Noguchi が西行を言い換えていることを、(5)は、英国の劇作家・詩人 Thomas Lodge (1558?-1625) の *Rosalynde* (1590) の初版の標題ページに載っている言葉であること、が記載されている。

### 鳥の智慧の Bird-Witted

無邪気にペンギンの眼を見開いて、大きな  
巣立ったばかりのマネシツグミが三羽  
ネコヤナギの木の下で  
一列に並んで立っている  
翼を触れ合わせ、か弱く厳かに、  
遂に彼らは目にする  
もはや自分たちよりそれ程大きくもない  
母親が不公平にも



自分たちのうちの一片の餌になる  
何かをもってくるのを。

高い調子の断続する、毀れた馬車の  
発条ばねの軋り音が、三羽の  
同じような、柔和に覆いのかかった  
鳥の目をした斑点だらけの姿によって  
発せられる方に向かって彼女はやってくる、そして  
一片の  
嘴からまだ生きている  
甲虫が外に  
落ちると、彼女はそれを拾い上げて再び  
その中に入れてやる。

密集した繊維状の淡い色の  
ネコヤナギの表面をした  
上着を身につけてしまうまでは 影の中に  
立ちながら、彼らは尾と羽を  
拡げて、一片一片示している、  
慎しやかな  
白い縞を尾の上には  
縦に 羽の下には  
横に、そして  
アコーディオンは

再び閉ざされる。何と嬉し気な調べが  
抜け目ない成鳥の  
喉から飛び出す急激な  
思いがけないフルートの  
音色と共に、その親鳥に戻ってくるのか、  
雛がここに現われる  
前には 遠くて  
強力でなかった太陽に

照らされた空から。その鳥の声は  
何と荒々しくなってしまったことか。

彼らを観察していた斑<sup>ふら</sup>の猫が  
ゆっくりと 木の幹にいるそのさっぱりと  
整った三羽組の方に這い寄ってゆく。

彼に不慣れなので  
その三羽は席を空ける——不安な  
新しい問題。

掴みそこねてぶらさがった  
足が持ち上って  
降ろして止まろうとする  
小枝を探し当てる。その

両親は矢のように降下しながら、血も凍る思いに  
焦ら立ち、骨折りの——希望に  
報いられる思いで——というのも 餌を何も与えられないで  
きいきい鳴いている口々を満たすものを  
何も銜えていないので、死闘を挑み  
殺さんばかりにする、  
銃剣の嘴と  
残忍な翼とで、その  
頭が良くて用心深  
く 這 ッ テ 行 ク 猫を。

—The New Republic, 85 (January 22, 1936), 311.

この詩には、Sir Francis Bacon：「もしも少年に鳥の智慧があれば」と自注がある。先人の言葉や、読んだり聞いたりした事柄に触発されて、豊かな想像力・連想力を駆使しての詩作は、ムーアの最大特徴の一つである。作中の詩句にも、直接の引用以外に、他人の何気ない言葉からの示唆によるものも少なくない。「彼は「鋼鉄を解消する」」の中で、「可視の世界の力は/不可視の世界である」と公式化したのは、ムーアの母親であった(M. 401)。この詩にも「か弱く厳かに」feebly solemnなる美事な撞着語が使われている。

スペンサーのアイランド Spenser's Ireland

は変っていなかった、——

その緑色に負けず劣らぬ親切な所で、

これまで私が見たこともなかった緑あふれる所だった。

どの名前も 調べになっている<sup>1)</sup>。

非難も罪人に何の差し障りにも

ならないし、何の打撃にもならないが、

話題にされないのは彼には苦痛に<sup>2)</sup>なる。

人々は自然なのだ、——

上着は星々で裏打ちされた

ヴィーナスの外套<sup>3)</sup>のようで、首のところ

しっかりボタンで止められていて、——両袖<sup>4)</sup>は使っていないくて新しい。

もしもアイランドで

人々が豎琴を、必要な時に終りから始めへと逆方向に演奏し

真昼に羊歯の胞子を

採集して 彼らの所謂

「鉄ですっかり覆われた巨人たち」を巧く逃がれるなら ことによると

頑固さを捨てるためと

魔力にかかった状態を元に戻すための、羊歯の胞子が

存在するのではあるまいか。

妨害を受けた登場人物に

母親がいることは

アイランドの物語ではめったになく、彼らには皆 祖母がいる。

アイランドらしいことだった、

結婚ではない縁組がなされたのだ

私の曾祖母の母が 不和に対する

本能的な才能を示しながら 次のように

言った時に、「お前の求婚者は

完璧ではないけれど 難点は一つで

十分です、彼はアイランド人では

ありません」。妖精たちより

機智に富み、復讐の女神たちと友だちになりながら  
何度も何度も「私は決して  
屈服しない」と言う人は 誰も決して分らないのだ

自分が自由になるのは

この上ない信仰に捉えられて  
しまってからなのだとすることを、——信じやすさに、  
そうでしょう？ 大きな優美な  
指が震えながら七月半ばの  
蠅の翅を針で  
分け離して それを 孔雀の尾とか  
ネクタイ用毛織物や  
ハゲタカの翼<sup>(5)</sup> で包む時、その指の誇りは、  
魔女の誇り用様  
用心の要はあるが、狂気の心配はない。連合作用する両手が亜麻の繊維を

ダマスク織りのために分離するが

それはアイルランドの天候に晒されて  
銀色に輝くセーム皮の  
皮革のもつ完全防水性を  
備えている。扱った首鎖や黄金の新月形の  
青銅器時代遺物は 宝石類ではない<sup>(6)</sup>  
紫サンゴのフクシャの木のようには。エールは——  
非常にこざれいな  
ウミバト<sup>(7)</sup> でヒースの生い茂る荒野の  
雌鶏で スピネット風の涼やかな  
ムネアカヒワ<sup>(8)</sup> は——無慈悲さを予示しているのか？ それなら

彼らは私には

魔法にかけられたジェラルド伯<sup>(9)</sup> のようなものだ 彼は  
雄鹿に、山岳の大きな  
緑目の猫に

変身したのだ。非商品は彼らを  
 不可視にする。彼らは姿を  
 消してしまった。アイルランド人は言う あなたの悩みは私たちの  
 悩みであり<sup>100</sup> あなたの  
 喜びは私たちの喜びだとでも？と。私は  
 そう信じられればいいと思う、  
 私は悩んでおり、私は不満であり、私はアイルランド人だと。

——*Furioso*, 1 (Summer 1941), 24-5.

(1) (2) (6) (10)については、Don Byrne の文章 (*National Geographic Magazine*, March 1927) 「アイルランド：私が切り出された岩」を参照との、  
 また、(3) (4)は Maria Edgeworth の『ラックレント城』*Castle Rackrent* の脚注や文章が、(5)には同じ Edgeworth の『不在地主』*The Absentee* の中の一文が引かれ、(7) (8)は Denis O'Sullivan の『グレンギャリーの幸福な回想録』*Happy Memories of Glengarry* が、そして(9)は Padraic Colum の講演から、とそれぞれ自注が付されている。

「エール」はこの作品が書かれた当時のアイルランド共和国の公式名 (1937-49) であった。「スピネット」は、16-18世紀ヨーロッパの家庭で愛用されたチェンバロの一種である。「スピネット風の涼やかな」は“spinet-sweet”の原詩の頭韻を及ばずながら拙訳でも生かしたつもりで、この種の工夫？は、各詩行の中や脚韻の場合共々本稿の訳詩の全てに互って可能な限り試みられている。

「鯨の中の滞在」でも、アイルランドへの呼び掛けがあった。ムーアには、アイルランドへの思いが深い。

メルキオール・ヴルピウス Melchior Vulpus

c. 1560-1615

対位法作曲家——

衆讃歌の

及びラテン語歌詞に合わせた婚礼讃歌の  
 だが 何にもまして讃美歌の 作者。

「神は讃えらるべきかな 誘惑に打ち克つ信仰ゆえに

それで苦痛も死も恐れないのだから」。

我らはこの芸術を信頼せねばならぬ——

誰にも理解できない

この精通ぶりを。それでも誰かが

それを習得し それを導く

ことができる。鼠の皮のおんご靴の呼吸が(1)

伸び拡がり有頂点になって言う

「ハレルヤ」と。殆ど

極度の絶対論者

にして遁走曲主義者よ、アーメン、ゆっくりと築き上げてゆく

小型の雷鳴から

死を解毒するクレッシェンド漸増を——

信仰を固める愛の署名を。

——*The Atlantic*, 201 (January 1958), 59.

自注には、「また、偉大な芸術家は、我々にとって不可思議であるばかりか、当人自身にもそうなのだ。彼には、自らの感じる力の本質は分らないのだが、それでも彼はそれを身につけて導くのに成功する」と Arsène Alexander, *Malvina Hoffman* (1930) からの一節が引用されている他、(1)には Daniel Alain, *Réalités*, April 1957, page 58 (とページ表示まで付して)「繁みの中の小鳥——その小鳥は囀りながら幹から幹へと飛ぶ。その肺は、機械的に行動する動物の全てがそうであるように、鼠の皮から組み立てられている小さな靴から成る」と引用が付されている。

IIIで訳出した10篇にも、ムーアの面目は遺憾無く発揮されていたことが分る。詳説は割愛したが、IとIIで扱った作品群に見られた、輻輳を内包した〈擬装〉である。奇抜で特異な心象を配することで具体的且つ微細な描写を生彩溢れるものにし、その華麗な〈擬装〉の下に抽象的な思索——人間観、人生観、社会観、文学論、芸術論、等々——を種々様々な韻律上の実験と絡ませて展開したのがマリアン・ムーアの世界である。本稿はムーアの詩を新たに21篇訳出し、特に、何々へ、と呼び掛けられている標題の詩と、「AはBである」という型

の標題の作品を考察した。

注

- 1) Margaret Holley, *The Poetry of Marianne Moore: A Study in Voice and Value* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) pp. 195-202. 以下(H. 195-202)のように略記する。
- 2) *The Complete Poems of Marianne Moore* (New York: The Macmillan Company/ The Viking Press, 1981).
- 3) Charles Molesworth, *Marianne Moore: A Literary Life* (New York: Atheneum, 1990) p. 99. 以下(M. 99)のように略記する。
- 4) 拙稿「マリアン・ムーアの世界(9)——生物に、無生物に托して——」(*ELM*, No.56, 1992年9月) pp. 40-41.参照。
- 5) 同上参照。
- 6) 同上参照。
- 7) 拙稿「現代英米詩覚え書(4)——マリアン・ムーア」(*ELM*, No.4, 1984年3月) pp. 19-21.参照。
- 8) Patricia C. Willis, ed., *The Complete Prose of Marianne Moore* (New York: Viking, 1986) pp. 586-88.
- 9) Taffy Martin, *Marianne Moore: Subversive Modernist* (Austin: University of Texas Press, 1986) p. 136.
- 10) Elizabeth Phillips, *Marianne Moore* (New York: Frederic Ungar Publishing Co., 1982) p. 230.
- 11) Bonnie Costello, *Marianne Moore: Imaginary Possessions* (Cambridge: Harvard University Press, 1981) p. 151, p. 152.  
尚、ムーアの作中のギリシャ語とラテン語については、中山恒夫本学教授と、柳沼重剛本学名誉教授に御教示を仰いだ。

Summary

Camouflage Having Plural Aspects  
——The World of Marianne Moore——

Twenty-one poems of Marianne Moore's are newly translated into Japanese in this paper, in which are mainly discussed the works with types of titles "To—" and "A is B". The objects addressed to and defined as are not only themselves but also somethings else. Her poems are camouflaged with many aspects, and such camouflage both hides and discloses the poet's own intent really and symbolically.

What her poems truly mean are various kinds of views of man, life, society, literature, art, and so on. They are not always the poet's own views, because they are often mockingly expressed. We must read the poet's own thoughts and feelings through the poems' camouflage having plural aspects.